



発行所
〒371-0026
前橋市大手町2-14-6
Tel.027-221-2746
E-mail
mae-cato@pop17.odn.ne.jp
Web
<http://www.maecato.org>

子供たちをわたしのところに来させなさい

御前ザビエル神父

今年は、B年ですが、主日の福音朗読は、マルコによる福音書です。先のことですが、10月7日、年間第27主日の福音朗読は、イエスが子どもを祝福する箇所です。「イエスに触れていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。」

しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。『子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。』そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された。」

(マルコ10・13-16)

教会と子どもについて色々な声が聞こえます。昔、子どもがたくさんミサに来ていて良かったと言う声。子どもは、将来、教会の支えになりますから大切にしなければならぬという声。それぞれ一理ありますが、過去と将来を横に置いて、現在、教会に来ている子どもが主日のミサに喜んで容易に参加でき、主イエスからの豊かな祝福を受けられるようにすることは、わたしたちの年間テーマの一つの課題です。

本来ならば、幼児、小中学生、高校生、青年、壮年、年配の方々、ミサに参加される方々のどんな歳であろうとも、それぞれの年齢に応じてふさわしい歌、ことば、動き等を工夫すれば、神の一つの民の意識が育てられ、子どもと成人も果たしていく役割を通して、互いを励ます

ことになると思います。

しかし、子どもを中心に考えてのミサも必要でしょう。子どもの信仰を育む中で、毎月第2の主日に子どもと共にささげるミサを続け、なお、幼児のためにあった「小羊のグループ」の再出発をして、子どもは、感謝と喜びにあふれてミサに親しむことができるように願っています。

もう既にお知らせがありましたように、6月24日(日)から毎月第4の日曜日に、新しく幼児のために「子羊キッズ」(仮称)が始まります。対象は3歳から小学校就学前の子どもです。子どもは、わたしたちの共同体の一員なので、お父さんやお母さん、兄弟や友だち、集まって来たわたしたちと一緒に、入祭の歌から、主日の典礼に入るのは、ふさわしいことです。ミサの始まりに、彼らのために何かを特別にしくとも、彼らは、集会の中に自分たちの場があるという体験ができます。

そして、集会祈願が終わって、彼らの理解を超えていることばの典礼に入る前に、司式者が彼らに呼びかけて、リーダーたちと一緒に、カルメル館に集まって、イエスのことばと行いを味わうことができれば、彼らも積極的にミサに参加ができることになります。

集会からしばらく離れたその時は、保育園や託児所にいるかのような時ではありません。実際に、子どもは、成人よりは、神の国に近いのですから、彼らも、十字のしるし、歌、当日の福音の紹介、塗り絵、祈りなどを通して、ミサに参加できます。奉納の行列の前に戻ってきた子どもは、行列に入って、できた祈りや塗り絵をささげものとして、誇りを持って、祭壇まで持ってきてくださるに違いありません。

「子供たちをわたしのところに来させなさい」と仰せになった主イエスの願いに答えて、「子どもが感謝の祭儀の中で困難なしに喜んでキリストと出会い、キリストとともに御父の前に立つことができるように」なれば幸いです。



【復活節の間、あわれみの賛歌に代えて行われた漚水。】

¹ 「子どもとともにささげるミサの指針」 55

一度来てください「熟年者の集い」

毎年恒例となっている使徒職協議会・生涯養成チーム主催の第15回熟年者の集いが、4月16～17日水上松乃井ホテルに於いて開催された。今回は代表の藤木靖夫さんの熱心な要請に応えて、岡田武夫大司教が初めて参加して下さり、皆大喜びだった。

初めにチーム担当の根津助祭からお話があった。(以下はその内容の一部である)

『30年位前に日本基督教団高崎教会で田原米子さんという方の講演を聞いたのを思い出している。彼女は当時50歳で、18歳の時鉄道自殺を図り両足と左手の三肢を切断、右手も小指と中指が切断された。お母さんに急死された寂しさから東京の盛り場で夜遅くまで遊んでいたが寂しさは消えることなく、疲れ果てた末に決行した。入院中に学校の先生を通して病室を訪れたキリスト教宣教師と青年の誠実な姿に心動かされて少しずつ心を開き、聖書のみことばに出会い、変えられたことなどを話された。田原さんは数年後その青年と結婚し、二人の娘を育てた。私には彼女が死からいのちへ過ぎ越した証し人と映った。田原さんが証したみことばは《キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた》(2コリント5・17)であった。私たちが人生の中で折に触れて思い出し、自分を励まし支えてきたみことばは何だろうか…』

この後、皆でお互いの近況やお話の感想などを分かち合った。それからゆっくり温泉タイムを過ごしたあと、夕方の懇親会に移った。食事が終わると参加者が自発的に、日本舞踊やハーモニカ演奏、それにカラオケなどそれぞれが得意わざを披露して大いに盛り上がり、楽しいひとときとなった。岡田大司教も桐生教会の飯野さんと一緒に「四季の歌」を唄ってくださったのだが、このような光景は初めて目の当たりにする人も多く、正に拍手喝采だった。

翌17日には朝食の後、岡田大司教のお話があった。(これも一部分であり、精確にメモを取っていないが)

『教会の出発の時には救いの体験が強かった。ナザレのイエスを認めない祭司たちは神殿を守ることに熱心で、律法をよく研究し一点一面も変えないように伝えていく役目があった。ローマから(役人が)派遣されて、帝国に支配されていた。イエスに出会って救いの体験をした人の中には徴税人マタイ、有名

女性マグダラのマリア、出血症を癒して頂いた女性などがある。イエスは徴税人、遊女たち、貧しい人、障がい者の仲間となった。そして安息日の掟を破って人を癒すなど、敢えて支配者の神経を逆撫(さかぬ)でするようなことをした。そうした生き方の結果が十字架となった。キリストは昇天の時、教会を設立した。「私はいつもあなた方と共にいる」と言われた。私たちを見てキリストが伝わってくれば神をあらわしているのだが、そうでない時代もあった。皆ある程度は実行しているし、よく実行(キリストを体現)した人は聖人となった…』

お話が終わるとそれに対する感想や、今回この集いに参加しての思いなどを自由に発表してもらった。最後に、忙しい中を駆けつけて下さった桐生教会の土屋神父により、岡田大司教、根津助祭と共に感謝のミサが捧げられ、閉幕となった。(岡田 賢一)

群馬女性のつどい いわき訪問

4月26日(木)、朝7時前に教会を出発し、太田で合流し、いわき道の駅四倉へと向かいました。2階のカフェテラスで昼食を食べたのですが、海の手前



に、高い防潮壁ができ、海が見えなくなっていました。震災直後は、打ち上げられた船が積み重なっていたのですが、きれいに撤去され、広場となりました。



火災跡となっていた久ノ浜には、防潮林の苗木が植えられ、緑の枝葉を伸ばしていました。津波で流された家々の土台は無くなり、新築の家が、所々建っていました。瓦礫の山があった場所とは思えないほど、きれいになっていました。復興商店街もできていました。



【↑ 久之浜町 コミュニティ商業施設 『浜風きらら』】

海に向かって、全員で祈りを捧げ、花束を流しました。波に揺れる花を見ていると、流されてしまった人達の姿に重なり、深い悲しみを感じ、今は安らかであることを願いました。

いわきの信者さんのお話を聞きながら、海沿いの松原を抜けて、「いわき・ら・ら・ミュウ」へ。市場の中を巡りながら、試食や、買い物を楽しみました。店員さん達の福島の言葉は、いつ聞いても、ほっこりします。元気をもらいます。

小名浜教会に着くと、隣の幼稚園で遊ぶ子ども達が、可愛いあいさつをしてくれました。震災直後は、放射能の心配から、園庭の木は切られ、痛々しかったのですが、園児のこえが聞こえる、普通の幼稚園の姿になっていました。

ミサの時間は、ちょうど、地震発生の時刻。その後、津波に襲われるなんて、みな、想像できなかったことでしょう。町の人々の不安、恐怖を思うと、胸が苦しくなりました。『神様、どうか、今も苦しみを抱えて生きている人達を癒し、原発による不安や危険を取り除いてください。』と、お祈りしました。

いわきの海沿いは、訪れる度に、整備され、震災があったことを、感じなくなってきました。ただ、信者さんが言われた言葉は、『今になって、疲れが出てきて、みな、体調を崩している』と。とても、気がかりです。震災後に、何度となく訪れ、一緒にお祈りしましたが、まだまだ、これからいっそうの、『共に祈る』ことの必要を、実感しました。

今回、いわきへの訪問を計画していただき、みなさんと参加できたことに、感謝します。また、より

初 聖 体



6月3日(日)「キリストの聖体」の祝日であるこの日、6名の子ども達が初聖体を迎えることができました。

昨年より初聖体準備講座で学習をしてきました。そして、初めてのゆるしの秘跡を受け、この日を迎えました。

ザビエル神父様は、「私も、初聖体を迎えた日のことをよく覚えています。皆さんも今日初聖体を迎えたこの日のことを心にとめて、大切にしてください。」とお話しになりました。

ミサの後、アレルヤ館にてお祝いのパーティーが開かれ、教会学校でお祝いをしました。

初聖体を迎えた皆さん、おめでとうございます。



【↑ 初聖体おめでとう！祝福の拍手につつまれました。】
【アレルヤ館でパーティー ↓】



多くの信者さんと共に、訪問できますように。

ありがとうございました。(上村 早苗)

典 礼 部 に 参 加 し て

典礼部は、オルガン奏者、聖体奉仕者、答唱詩編朗唱担当者、聖歌隊、香部屋係などで構成されています。

二ヶ月に一回のペースで、木曜の夜7時から御前ザビエル神父様の指導で『典礼ノート ミサの手引き』をテキストに勉強会を開いています。また、この会において聖週間や降誕祭ミサの打ち合わせも併せて行うこともあります。

この五月の回ではミサにおける「奉納」について学習しました。みことばの祭儀に続き、感謝の祭儀の準備としての奉納の持つ意味を、旧約の出エジプトにおける過越の食事、その後イスラエルの地で長年行われていた安息日の過越の食卓、そして現在まで続くミサの感謝の祭儀を学び、奉納の祈りに込められている福音的、歴史的な意見を理解することができました。毎回、ともすれば漫然とミサの時間を過ごしてしまいかねない私たちですが、聖書や教会法、カトリック教会の歴史を学ぶことで、日々のミサが、より親しみ深く、興味深いひと時になると思いました。

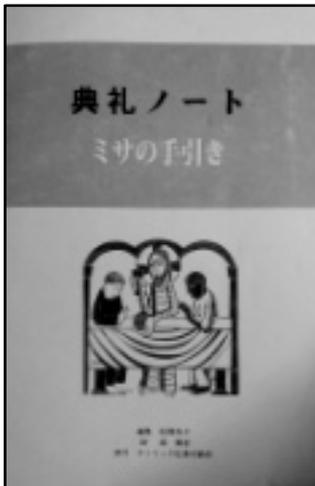
また、毎週のミサに関わることと言えば、共同祈願において、その日のみ言葉に関連した事や、私たちの共同体についてなど、典礼部で毎週分担して、自分の祈りの言葉で捧げています。

この典礼部では、この木曜日の夜の会のほかにも、金曜日の午後二時から、神父様を交えて主日のミサ聖歌を選曲しています。その日の典礼にふさわしい曲選びはなかなか難しいものがありますが、神父様の典礼の解説がとてもわかりやすく、丁寧にミサ準備を行えることはとても有意義であると思います。

また慣れない曲については、ミサの前に練習することも定例化され、歌える聖歌も増えてきているのではないのでしょうか。

よりよい祈りを捧げるために、より深くミサを味わうために、典礼部の集いはとてもよいひと時であると思っています。

(上北 聖司)



さいたま教区新司教が任命されました

6月2日(土)、教皇フランシスコは、サレジオ修道会日本管区長 マリオ山野内倫昭神父をさいたま教区司教に任命されました。

マリオ 山野内倫昭 ^{ひせん} 被選司教 略歴

1955年12月8日 大分県佐伯市に生まれる
1963年 家族と共にアルゼンチンへ移住
1975年 サレジオ修道会入会(アルゼンチン)
1997年 日本に帰国
2014年12月4日 サレジオ修道会日本管区長

群馬使徒職協議会主催
晴佐久昌英神父様 講演会
テーマ『教会と共同体としての福音宣教』
6月27日(水) 10:30~15:30
場所 高崎教会

前橋教会 今後の予定

☆ ☆ ☆

7月15日(日) カルメル祭が行われます。

☆ ☆ ☆

8月4日(土)~5(日)
教会学校のサマーキャンプが桐生研修センター
フランシスコの家(旧聖フランシスコ修道院)
にて行われます。

☆ ☆ ☆

群馬中央北ブロック主催『平和旬間』
テーマ「知り合うことから平和を！」
日時 8月11日(土) 10:00~14:00
場所 前橋教会
主な内容 フィリピン人の日本での体験を聞く
平和を求めらるみことばの祭儀

赤城山麓祈りの家 エキキュメニカルな交流会

日時 7月16日(月) 海の日 午前10時より
場所 赤城山麓祈りの家
(渋川市赤城町宮田字稲荷1436-3)
※昼食は各自持参
主催 群馬地区在セフランシスコ会